

My Page

Contents

▼巻頭特集

「祭のあとに楽しい夜」～中谷健太郎氏を囲んで～
「由布院の魅力的な人」

▼地域レポート

「金蔵学校」(輪島市)
「町野の活性化を考える会」(輪島市)
「三井の活性化を考える会」(輪島市)
「能都町商工会青年部」(能都町)
「七尾西湾の自然に
ふれあう会『散歩路』」
(田鶴浜町)

「白山一里野温泉
観光協会」(尾口村)
「ボランティアグループ
KUMA」(小松市)

▼交流とネットワーク

「四季の里」
「第13回地域づくり団体
全国研修交流会」
「第14回自治体学会」

▼コア・エッセイ

「まちなみの特徴が
街の魅力を語る」

石川県地域づくり推進協議会

VOL. 7
2000.10

情報誌

か
たり
あ
い

互いに語る、
地域を語る、
愛情をもってかたりあう。
そして、何かを始めましょう。

卷頭特集

祭のあと 楽しい夜

—中谷健太郎氏を囲んで—

新しい店や大きな建物も増えて、問題を抱えている由布院。それでも、それらへの対応も含めて参考にすべきことは多い。由布院で活動している人々も魅力的です。リーダーの中谷健太郎さんや溝口薫平さんをはじめ、彼等の考えに共鳴し、より面白いものを創ろうと努力を続けている方がたくさんいます。映画祭が終わった翌日、中谷健太郎さんを囲んでお話をうかがつた。加賀市役所から由布院観光総合事務所に出向している角谷明美さんにも同席してもらい、途中から井尾御夫妻、中谷次郎さんも参加され、楽しい由布院の夜でした(2000.8.28)。

【出席者】 中谷健太郎 (亀の井別荘)

角谷明美 (由布院観光総合事務所)

林 弥子 (まれびとピア懇話会)

高峰博保 (グレーヴィ)

林◆文化記録映画祭の際には、お忙しい中、メッセージをいただきありがとうございました。

中谷◆僕は去年まではいろんなところに補助金とかをもらいにまわり、友達には来てくれようと切符を送ったりしていた。今年は、友達には切符一枚もおごらんと、お世話になった人とかに送った。そして、「とにかくあんたが呼び掛けて金を集めてくれ」と。

林◆「おかげの糸」というお手紙の言葉が良かったです。

中谷◆考えてみれば、本当にいいセリフですよね。だけど、本当にそう思った。お世話になって、おかげでなんかこう、ともすると薄らいでいく糸がまた、深く太くなってしまったな!と。林◆何か嬉しかった。何も出来なくて、本当に細い糸なのに、なんとなく参加意識ができる。

中谷◆なんとなくどこかに仲間がいる、その仲間にキーパーソンがいて、その人に頼むと手を握ってくれるという気分です。とてもありがたかった。

角谷◆文化記録応援団というのがあって、浜野さんという健太郎さんと同じ年の女性が中心になって、「お金がないのにやろうと言うのは凄いよね」と言いながら、「私たちができることで資金の一部を寄付します」と、月1回のバザールで、自分たちで何か作って売つて。

中谷◆売って売りまくって、そして金を作ってくれたんですよ。

角谷◆日曜日にバザールがあるので、日曜日は喫茶店もかき入れ時なのに、会場に駆け付けて下さる。文化記録映画祭を応援しようという気持ちで一生懸命やってくださる。映画祭の当日は、昼食を作つて売つて、その売上も寄付してくださる。



前面に縁とベンチを配したお店



井尾佳子さん、林さん、中谷次郎さん、井尾孝則さん、角谷さん、中谷健太郎さん(天井桟敷のベランダで)

[魅 力 的 な 人]

林◆本日は、昼から井尾さんのおとうさんに由布院の魅力的な人と空間を御案内いただきました。

中谷◆たかちゃんがね。いい年をしたおじさんをつかまえて、そんなこといつちやいけないんだが。

林◆10才ちがうといわれていましたが。

中谷◆本当に色々なことをね、先頭を切ってやってくれて、井尾のたかちゃんと時松さんがおつてくれるおかげで、どんどんいろんなことが出来ている。

角谷◆駅前のちょっとといったところの商店街が土曜夜市をやっているんです。井尾さんの店までは入っていないんですよ。あのへん田中市という地区なんですが、みんなやらんからわしがやるんや！と、「田中市夜市」と勝手に名前をつけて、看板出して、とうもろこしを200本ぐらい仕入れて、総合事務所にある500人鍋で湯がいて、炭おこして、そのへん通りかかる人をつかまえて売って。ぜんぜん200本とか捌けないんだけど、隣にある民宿のいよとみ荘のお客さんも買ってくれて、盛り上がって。飲み放題食べ放題で一人1000円とか、どう考えても割に合わないんですけど。

中谷◆こっちからすぐ出てきて、お互いが結び合っていくかどうかだよね。まず頭がでてくるかどうか、次に出てきたものが結びあわされるかどうかだよ。まあ、頭がでてこなきや話にならんわけで、出てきてもひとりほつちじややれませんわな。可哀想で、ひとりほつちでは。

高峰◆由布院はいろんな人が集まっていますよね。健太郎さんや薰平さんが目立つていらっしゃいますけど、共鳴してる人や、ある面では反発していても、なんとかしようという意欲をもつた人がたくさんいらっしゃる。

中谷◆いろんな考え方のグループが生まれる素地がある。

高峰◆2月に加賀にお越しいただいた際に、おつきあいさせていただいて良かったのは、中谷さんや溝口さん以外の方と

お話をできたこと。そういう方々が周りにいるから、今の由布院が成立している感じました。ただ、このことは案外伝わっていない。多くの人は、亀の井、玉の湯は別格で、特殊な存在だととらえている。そのような認識である限り、路線の転換はできない。



[“しゃべりちゅうぶ”]

中谷◆みんないつぱしそれぞれで。今日も商工会の会があつたけど、わいわいみんな言うわけ。「しゃべりちゅうぶ」という、じじばばの役を僕や薰平さんはしているんですよ。

高峰◆それが重要ですよね。

中谷◆それは重要なだけど、親の代は分かったことをあまりいわないじゃない。

高峰◆自分が分かっているから、1回言えば他の人間も分かるはずやと思ってしまうと、動かないし、伝わらない。

中谷◆同じことばっかり言つているとあまりかつこよくないしさ。それを臆せず言い続けないといけない。うるさいな！あのおじいも、とうとう「しゃべりちゅうぶ」になりやがった、というくらいになって、だんだん自分の芽が出てくるんだね。なるほど、りっぱですということでは全然伝わらないですね。「あほ、帰つて布団かぶつて寝とけ」といわれるようになつた時ぐらいに、だいたい伝わる。まだまだ、伝わっていないね。来年の5月に伝わることになっている。来年の5月の総会で最高に盛り上がって、伝わることになっている。ほほ、大丈夫ですね。いくつかのグループが無事に生まれたから。

角谷◆観光フォーラムにしても、スムーズにあそこまでなつ



夢想園からながめた由布院



クラフトショップ“アトリエとき”的前庭



中谷健太郎(亀の井別荘)

たわけではなくて、1週間前に、その日を迎えるにあたって、若者たちが勉強会しようと集つたはいいんですけど、どんな風に勉強会していいか分からなかつた。健太郎さんに、こんなふうにやつたらアドバイスもいただいたんですけど、なんとなくうまくいかなくて、何回も重ねるうちに、やつと突つ込んだ話ができるようになつて、当日、4人の人が発表できた。若者たちが手法をやつと学びはじめた。

中谷◆はしごの途中まであげておいて、ぱつとはしごをはずしたようなもの。

高峰◆経験しないと分からぬことってあるじゃないですか。一から十までやってみて初めてわかる事もある。とりあえず、機会を与えることが親の世代の役割なんですよ。いざとなつたら責任とつてやるから、やってみろと言えるかどうか。

中谷◆自動車の運転と一緒にね。何年間も助手席に座つても、自分では運転できないのと同じ。赤です、青ですとかは言えるけど、お前やってみろと言われてもできない。やっぱり自分でやるより以外ない。だけど、助手を長いことやつていると、実際、道を走ると要領はいいわな。

[観光学は地域学]

高峰◆中谷さんは自分の旅館の経営に直結しないような活動をいろいろされていますよね。

中谷◆やっぱり、この地鶏おいしいでしょう、と言いたいわけ。鶏を飼うことから、野菜をつくることまで全部はやれないでしょ。本来はそれをやらないと、今夜のたつ小さなテーブルだって出来ない。木だって山で育てないといけない。たつた一夜のテーブルを、2、3時間楽しくする、観光としてはごく初步的なことができないわけです。それができな

いどうなるかというと、塩はここでできないから、塩が手に入らないから、料理ができないとか。観光が壊れるということは観光業者が潰れるかどうかはどうでもいいのであって、ここで暮す交換経済ができなくなること。だから、直接関係ないということは何もなく、すべて関係があります。「観光学は地域学だ」ということをとにかく認識してほしい。地域が生きていくためには、交換経済で市場があつて成り立つているわけですから。昔はもっとはつきりしていた。塩引きが山を越えて来るし、鉄のカマとかクワとかつるはしもつた鍛冶屋は来るし、鍋、釜、バケツ、蝙蝠傘の修繕なんて知らないでしょう。「なべ、かま～、ばけつ、こうもりがさのしゅうぜん」。そういうので成り立っていたわけでしょう。時には浪花節や村芝居がやってきて。そうやって、みんなで外から来る文化やものやいろんなものを待ちわびていたけど、今は知らん顔しているでしょう。日本は観光省を作っていない先進国の一つ。あちこち、観光省を作つてそのため悪くなっている国もありますけどね。日本国が成り立つ、成り立たないをどこかに観光大臣を作つて、その問題は観光がやればいいんだとは誰もいませんよ。農業のことから、自動車の輸出のこと、大気汚染のことまで。

高峰◆観光業の方が地域のいろいろな産業との関係をどれだけ意識しているかということと、いわゆる観光業以外の方が観光との関係をどれだけ考えているかという両面がある。

中谷◆両面はあるけど、町の中には賢人、ワイズメントがいて、「しゃべりちゅうぶ」になって言わないといけない。村のつきあいは村のつきあいで行ってね、野焼きの時に間に合わんで一番最後に、よたよたついていく。「ちょいとみんな、もつとゆっくり歩いてくれんかや」とか言ひながら。

[芸能の時代]

中谷◆こういう次第でこうなつたんですよということを、こ

由布院の魅力的な人

由布院にはいろんな人がいます。
彼等が、由布院の魅力を形成する
重要な役割を果たされています。
2月に加賀へ視察に来られた際、
懇親会でお会いした方々を中心に、
井尾百貨店の井尾孝剛さんに
ご案内いただきました。



東京からやってきていた学生の森さん、森谷さん、大川さん(左から)

高倉忠雄

(たかくら緑樹園、ねんりん)
由布院に着いて最初に出かけたのが、お花屋さんの高倉さんが経営している和風レストラン「ねんりん」。ちょうど、社長の高倉忠雄さんがフロアで接客されていた。加賀にお越しいただいたお礼を申し上げ、早い夕食をいただきました。由布院らしい地鶏の料理に舌鼓を打ち、地ビールをごちそうになる。花屋の横に建てられた店は、緑と花にあふれ、年輪の名の通り、太い柱が4本、建物を支えるように立ち上がつていました。御主人のこだわりがうかがえました。お忙しそうでお話はあまり出来ませんでしたが、接客されている姿が一番のスタッフ教育なんだろうなと感じさせられた次第です。



ういう問題点があつて、ひとつひとつ役員のみなさんに話してクリアしたんですよという証拠を残しておこうと思う。新しいことは何にもしちゃいけない。古いことだけを懸命に整理しても、たぶん命が足りない。撮りっぱなしのビデオとか。これからは新しい気のきいたことを言っちゃいけない。荷物しようとしている上に新しい荷物をしようようなもの。「風の計画」という本は15号でやめて、今度は「風の記憶」という本が出る。記憶はなんぼでも一杯出てくるから。

高峰◆風の記憶ですからね。

中谷◆風の記憶ですから、私の記憶じゃない。責任感があいまい。

林◆常に流れていて、日々蓄積されていきますからね。

中谷◆活字とか、ビデオとか、いろいろ残そうと思って、やりますけどね。弔辞詠んだり、酒呑んだり、あほなことを言うたり、みんなコミュニケーションなんですよ。徹底的にコミュニケーションソッドが痩せてしまったなというのは芸能なんですよ。世代を越えて地域の財産が残っていた。木こり歌とか全部唄えますよ。今絶対ないです。宇多田ヒカルの歌は唄えないし、子供達との断絶はひどい。子供達と断絶するということは村の中が断絶しているんですね。加賀の人を迎えた時に、我ら九州じゃと、とりあえず、食べ物があるから、それも特長があやしくなってきた。酒がありますね。一番個性が出ていたのは芸能のはずなんです。それが完全に壊れた。建物がいくらか。服なんかもうない。服と芸能ですかね、地域性がなくなつたのは。

林◆本日、井尾さんに連れていつていただいたところでは、すてきなユニフォームを着ていらっしゃいましたね。

中谷◆あれは、あの商売の中で流行っていますからね。湯布院という地域性をもつてているわけではない。服装が地域性を失ってから長い。いろんなメディアを通して残したり伝えたりしようとしてやっているけど、それぞれのツールは、活字からビデオから、しゃべりちゅうぶまで、すべてのメディア

と能力を使って総動員して伝えているけど、一番ツールで落ちているのは芸能ですね。100理屈をいうより、歌を唄つたほうが、よいしょということになることがある。

高峰◆メディアが多様化している割には双方向のコミュニケーション能力が落ちている。

中谷◆総合的な像が伝わるか伝わらないか、いくら上手に演説しても伝わらないでしょう。歌を唄うと通じる。踊りなんか見た日には全部通じちゃう。そういうことを今心掛けているから。



角谷明美(由布院観光総合事務所)

【使ふことと能書き】

中谷◆加賀は京都に負けるなど、菓子もお茶もある。ああゆうのがあるとどんどん良くなる。

林◆地元の産物をもっと使わないといけない。そうでないと、文化が育たない。

中谷◆作ってるやつが立派で、能書ききたれながら、何もつくれなくてただ呑んでいるやつはあほかと言われているけど、実はあほが大事なんです。

高峰◆如何に能書きをつくるか、議論を徹底してするかが大事であると本の中で書かれていますね。

中谷◆今日も能書き、明日も能書き。湯布院は能書きが多い。

高峰◆田舎に行くと能書きを垂れることを良しとしていない。そういう心性があると、ちゃんと議論しないから、なんとなく決まつてしまつてしまう。平均的なものになる。

中谷◆みずから監獄に入っちゃう。自分で牢獄に入っちゃう。牢獄をぶちこわさないと。

高峰◆異端の人間を許容できるかが問われている。異端の人間を認めないと新しい文化は生まれない。

中谷◆生々しい好奇心が大切ですよ。エロチズムは好奇心から始まる。根源的に、観光はまればとを迎える。村の神社を作つて、まればとは神様だから、神を迎える。古代からま



「湯布院幻燈譜」



「風の計画」

井尾孝則(井尾百貨店)

食料品と飲料を中心としたお店を経営されているが、店の隣に無料で入れる家族温泉を2つ用意されています。店の前にはベンチが置かれ、「観光もてなしトイレ」のかたつむりのかわいい看板がかかけられています。木のワゴンの上には地物の野菜などが並べられ、その横には生花が飾られていました。道路をはさんだ向かいにある駐車場は砂利のままで。他の井別荘も由布院美術館も同じようになっています。



昔は呉服屋だったので「百貨店」という名前がついていますが、ワン・フロアだけの小さなお店です。由布院らしい店づくりのモデルとして「ゆふいん建築・環境デザインガイドブック」にも紹介されています。

高田徳明(山荘わらび野)

専業農家が思いきって旅館を始められて13年。料理は昔から好きだったそうで、徐々に大きくされてきています。由布院音楽祭を支えるクラシックファンの一人。輸入ものの大きなスピーカーが鎮座した談話室はパロック音楽が流れ、落ち着いた雰囲

気でくつろぎやすいところでした。建物には由布院の木を使い、温泉につけて独特の色を出しているとのこと。「製材してからの管理がしっかりとしないと歪んできたいへん。」と物静かにおっしゃられた。宿泊の建物はそれぞれ離れ屋になつていて、庭には小川が引かれ、魚が泳いでいました。駐車場も含め庭園はすべて土のままになつていて雑木林の中のお宿という雰囲気になっています。





林 弥子 (morebitoピア懇話会)

れびとを迎えて、居着き人がようこそという以外に食えなかつた。男が女に出会うから、子供ができるんで。観光業とは町にとって子供を産む業なんです。産婦人科みたいなものですね。

[週刊誌に叩かれて]

高峰◆この間の文春へのお手紙は良かったですね。

林◆あまりの大人の対応ぶりに恐れ入りました。

中谷◆正直でしょう、あれ！

林◆いやあ、2、3枚上手のお返事で。素晴らしい返球で。あんなお手紙をもらっちゃ何かしないと。

中谷◆何かしてくれるみたいね。

角谷◆総合事務所の事務局長もすぐ東京に飛んだんですよ。

中谷◆あればね、読んだ翌日すぐ返事を書いた。もたもたしてやつたんじや利き目がないから。佐々木小次郎、戻りたいなもので。

高峰◆一面では当っていますよね。地元の方も以前から書かれています。

中谷◆まるで当っているんですよ。むしろ今、こちらのリアクションが一番大事なの。リアクションを問われているわけだ。最初のリアクションだけでなく、実質的なリアクションがぐーっと出てこないと、あの人達が「そうか、猫屋敷はないよな！」というふうに感じるまでどうやって固めていくか。

高峰◆フードピアも同じでした。地元で若い衆がいくら言っても、お父さん達は聞いてくれない。それでも、しかるべき人がやってきて、「金沢の食べ物も御菓子もまずくなつたんじゃないですか」というだけで、少しは考へてくれるところがあつた。それと同じことがありますよ。

中谷◆若い人達には理想の形や能書きは伝わっているんだけど、ああゆう人達とつきあうノウハウ、腹決めはまだ伝わっ

ていない。遠慮してるんだよ。天下の文芸春秋だとよっぽどりつぱな人がやつてると思ってしまう。

こんなうまいワインでも飲みながら、がんがんやつて、同志に引つ張り込んで、いつしょにやろうぜ！という風になってしまふこと。一緒にやるしかないんだから、世の中。

俺なんか、選挙は全然だめでノンボリの典型だけど、ようするに選挙というのは敵を引つ張り込むことなんだよね。観光も何もみんな一緒ですよ。敵が見えたならしめたと思わないといけない。敵はそれまで見えなかつたんだもの、それが見えただけで進歩ですよ。敵は敵だけど、仲間にするための、つまり潜在仲間なんだな。これまで、顔が見えなくてどうしていいかわからなかつたんだから。顔が見えた、よし突っ込め！とならないといけない。

[観光総合事務所]

林◆観光総合事務所を作られた意図はどういうところにあるんですか。

中谷◆やはり、まちづくり情報センターですよ。NPOの先取りです。

高峰◆観光ということをかけているけれど。

中谷◆できるだけかくしていくための事務所ですね。NPGOといって、とにかく、非営利団体であることはもちろんだけど、ガバメントではない。そういうものが今後あちこちに力をつけて、群雄割拠時代に入らないとね。行政の御大が中央から金もらってきて、お前らこうだというようなことでは生きていけないと思うんですよ。そのための、最初の一つの核ね。オンラインじゃなくて、ファーストワンです。どんどんどんどん作っていけばいいと思うんです。大事なことはNPGOが連携してよくことに慣れること、そういう意味では僕は合併ということには反対なんです。単純に合併すればいいというものでもない。全然解け合わないような異色なやつ

志手淑子 (夢想園)

由布院はすりばち状ですから、夢想園からは全て見えます。いろんな人が入ってくるのはとめられませんね。今まで町でやってきた人たちの力が、後から入ってくる人より大きい場合は、なんとかできますが、力関係が逆転してしまうと、良さがあつという間にになります。加賀は加賀百万石の何百年の伝統文化をもっていますから、皆さんそのノウハウとか良さを分かっているはずですよ。旅行形態も変わり、旅館も転換をはからないといけませんね。由布院は何もないんです。歴史的遺産があるわけでもなく、伝統工芸があるわけでもありません。過去30年間ぐらいで由布院はたしかに成長しましたが、加賀には到底かないませんよ。歴史なり、素材を再評価して活用する方向に向れば、加賀には可能性が十分あります。(談)



高橋鶴子 (由布院美術館)

由布院で亡くなった放浪の画家、佐藤溪の作品を展示している美術館を経営。お住いは別府にあるが毎日のように由布院へ。「最初は金鱗湖のそばに溪さんの弟さんがやっていた小さな美術館があった。農家の建物のような非常にぴったりとしたいい美術館でした。その時が初めての出会い。小さい時からよく美術館に出かけていたが、その出会いはすごい感動があった。」その後、弟さんが作品を売ることになり、作品をまとめて貰うことに。由布院で美術館を作ることが条件だったし、中谷健太郎さんたちも残そうと運動されていたので、由布院で開館。建築は以前から好きだった象



設計集団にお願いする。「由布院の最大の魅力は自然とこの狭さ。もちろん、魅力的な人もたくさんいらっしゃいますが、自然の良さの中で、それを活かすことが大切。」

がいっぱいいて、NPGOがそれなりに連携しないと生きていけんよなとなる。連携の技がどう磨かれていくかで21世紀は決まると思いますよね。大きく一つにまとめていくというのは侵略主義ですよ。会社でも何でも。鶏頭となるも牛尾となることなかれ！というけど、それぞれのグループがいっぱいあって、俺は俺だぜ、あいつは全然分からない、だけど一緒にどうやってつきあっていくか、これが21世紀的な生き方の中心課題だし、それを率先してやってきているのが観光ですよ。わけのわかんない人が来るわけだから、そして、その手を握るんですから、それは観光業者しかいない。子供達にも、根源的に人間が一緒に生きていくという生きざまの中で、重要なことを率先してやっている職業は観光より他にないと言いたい。教育とか医者とか他に色々いますよ、それはそれぞれの専門分野で、それに大事なことですが。観光ばかりは、全然知らないやつが、異人が来るわけだ。まれびとが、やあ！ようこそ！と言った時に、建物から、食い物から、宗教からすべてがちがう同士がどう出会うか。宗教がちがうからお前入れないよ！なんて言つたら、トルコへの旅なんてできやせん。

[仲間からみんなへ]

中谷◆仲間以外は敵だぜ、敵に囲まれたから、仲間が力をあわせてというのが第一段階。次に、しかしながら、一步出たら敵だけ、仲間だけでくつづいていたらだめになるんじゃないのか。やっぱり、敵じゃないというやつがいる。それはみんなだと思う。だから、“仲間からみんなへ”ってのが僕のテーマなんです。

観光客のための祭りかとよく言われるけど、今日も1時間ぐらい議論してた。食文化を育てるのはちゃんと観光客というか、よそからちゃんとした人を呼んで、その人が「この郷土料理はすばらしい」という場を作つてこそ郷土料理で、私ら

がただうまい、うまいと言つては郷土料理でも何でもない。どうしても、そこの議論は解けない。よそものだけが喜ぶのはお祭りじゃないと。

林◆その議論はどこでも必ず出ることです。

中谷◆もう飽き飽きしてきた。本当の優しさを持っている人達はよそものとか、言いませんよ。よそものが好きだから男と女の間もできた。

高峰◆そんなことを言つている地域から子供は出ていくんだな。子供は異人だから。

中谷◆そうそう。

高峰◆20才以上年が離れているということは、ちがう世界で育つということですよ。完全にちがう存在と思わない。

中谷◆だから面白いんだよ。

高峰◆大人達の発想が変わらないと、子供達も帰つてこないし、よその人も定着しない。

まれびとという概念は重要です。まれびとの関係性の中で、どう地域をつくるかということをテーマにしています。

中谷◆だから、仲間からみんなへ、というテーマは狂っていないと思う。仲間は仲間という愛情を深めながら、みんなとのつきあいをどうするか、という議論をとともにしないと。仲間というものは充分に安心だから、心はみんなに開いていく。それが観光の概念だし、21世紀の生き方だ。

林◆いわゆる観光化をしない地域であつても、そういう取り組みは必要なんですよね。

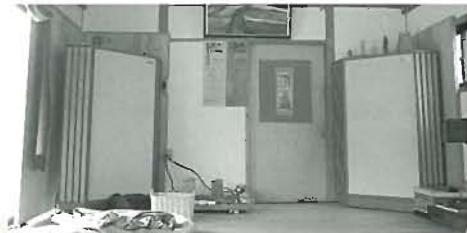
中谷◆それはそうなんだ。

高峰◆同じような世代だけで凝り固まつた共同社会を作つていて、若い衆の言うことを聞かないとか、女性たちの発言の場を作つていないような地域社会に、魅力を感じる人は少ない。だから、若い人は出てゆき、嫁は来ないとことになるのでは。



野々下一幸

竹細工で照明器具やざるなどを作つてゐる野々下さんは、由布院の音楽仲間の一人。仕事中に突然お邪魔したにもかかわらず、仕事場の上にあるオーディオルームに案内していただき、クラシックを聞かせていただきました。わらび野と同じスピーカーが設置され、眼下に由布院盆地が眺められる絶好のスペースです。窓も開放して聴かせていただいた曲の美しさが記憶に残りました。帰りに、先が細くなつた手作りの竹箸をみやげにいただきました。これがまた使いやすいお箸で、好評です。野々下さんの作品は龜の井別荘のお店でも売つています。



ここに紹介させていただいた方々以外でも、

観光総合事務所の米田誠司事務局長、

堀 裕子さん、其田秀二さん、井尾 淳さん、

観光総合事務所で出会つた大川隆司さん、

森 英介さん、森谷裕美さん、

川沿いを歩きながら

おはなしをした小母さまなど、

多くのみなさんにお世話になりました。

楽しい由布院でした。



金鱗湖のそばにある“じねんの会”的直売所

【地域レポート】

1

かなくら
金蔵学校 (輪島市)

連絡先／代表者：石崎 英純（いしざき・えいじゅん）
TEL 0768-32-0277
輪島市町野町金蔵工部32 〒928-0236



往古は千石在所であった金蔵集落には、85戸のうち5つの寺院があることを活かし、寺院を中心とした自然景観を立派にしようと活動している。山菜や山野草も豊富なので、昔から伝わる山菜料理を囲んでの食談議や、各寺院の宝物などを公開しながら伝説や思い出話などを語り合うなど、できるだけ楽しい集いにしている。山菜や山野草はビデオ収録して、集落の皆さんに観賞してもらい、理解に努めている。
過疎が進む集落を、特異性ある「やすらぎの里」にしたい。



2

町野の活性化を考える会 (輪島市)

代表者：堀 秀知（ほり・しゅうち）
連絡先／事務局：輪島市役所町野支所 実法 進（じつぽう・すすむ）
TEL 0768-32-0001
輪島市町野町粟蔵川原田22 〒928-0215



町野地区の将来を考え、地域の発展を図るため、豊かで住みよい、活力とやすらぎのある町づくりを目指して設立されました。これまでに、町野バイパスの建設に関して、地元の先頭に立つて交渉するなどの活動を通して地元行政と関わっているほか、町野高校跡地利活用問題に関しても、地域の活性化を念頭に置き、地域住民からアンケートをとり、行政側との交渉を図っています。



3

三井の活性化を考える会 (輪島市)

代表者：西浦 弘（にしうら・ひろし）
連絡先／事務局：山浦 芳夫（やまうら・よしお）
TEL 0768-26-1006
輪島市三井町興徳寺35 〒929-2379



主な活動としては、特産市場の開設、あての葉を添葉として利用するための生産販売の支援、「森とエコロジーの町宣言」に基づく活動計画づくり、「あての森フェスティバル」の開催などを行いました。能登三井駅の無人化の際には、サロン「杜の駅」を駅舎に設置しました。平成3年の夏の「あて祭り」を盛会のうちに終えたとき、お年寄りの皆さんが「良い祭りだった」と喜び涙されたことが心に残っていますが、地域内に職場が少ないため、若い人は当会に参加したくても通勤時間等の関係から困難であることなどが活動の問題点になっています。



4

能都町商工会青年部

(能都町)

代表者:井上 徹(いのうえ・とおる)
 連絡先:商工会事務局 大黒 美憲(だいこく・よしのり)
 TEL 0768-62-0181
 鳥至郡能都町字宇出津ト44-4 〒927-0433



社会貢献活動として「シンデレラ・プロジェクト」を実施中。
 巨大なかぼちゃを保育園児と保母さんがともに育てることで、
 自然保護と自然教育のきっかけづくりをしようという試みです。青年部で種から植えて苗をつ
 くり、各保育園に配って育てていただきました。
 昨年は「めだかプロジェクト」を行いました。写真はその際の様子です。



詳しくはホームページを。URL <http://www.ishikawashokokai.or.jp/noto/>

5

七尾西湾の自然にふれあう会「散歩路」

(田鶴浜町)

代表者:時国 公政(ときくに・こうせい)
 連絡先/事務局:田島 義久(たじま・よしひさ)
 TEL 0767-68-6423
 鹿島郡田鶴浜町田鶴浜二部260番地 〒929-2121



野鳥の宝庫である七尾西湾の豊かな自然を知り、
 ふれあい、守っていく活動を通して、住民、特に
 次代を担う子供たちの古里を大切にする気持ちを
 育て、自然の豊かさを未来に引き継いでいきたいと活動しています。親子のふれあい活動を大
 切に平成11年より、巣箱作りの会や、ふれあい探鳥会、「海の生き物たち」の自然観察会等を開
 催しています。また、会報「さんぽみち」を発行しています。



6

白山一里野温泉観光協会

(尾口村)

代表者:林 与枝男(はやし・よしお)
 連絡先/事務局:白山一里野公園管理事務所
 TEL 07619-6-7412
 石川郡尾口村字尾添リ63 〒920-2333



北陸・中部・近畿・関西地方への歴訪宣伝や
 キャンペーン、イベント等を行っています。
 また観光地として、一里野音楽祭をはじめ、
 村や白山スーパー林道が主催する行事への協賛等、県内外への宣伝活動を行っています。
 平成11年度には、住民参加の「一里野夢づくり計画」を、当協会が中心となって策定し、地域
 の特性(資源)と文化を活かした地域づくり、体験型の保養地づくりに取り組んでいます。



7

ボランティアグループ KUMA

(小松市)

代表者:岡田 一貴(おかだ・かずき)
 連絡先/事務局:小松市西部児童センター 宮本 仁美(みやもと・ひとみ)
 TEL 0761-22-3100
 小松市下牧町ニ34 〒923-0026



平成8年小松市西部児童センターOBが集まり結成。
 児童センターの子どもたちとの交流、活動協力から始
 まり、イベントや近くの海岸清掃などの活動をしてい
 ます。メンバーは中学生から社会人までと幅広く、み
 んな子ども大好き人間の集まりです。





静岡「四季の里」交流の旅

「四季の里」で感じたこと

「四季の里」に出逢ったのは、一冊の地域づくりの本の中のことであった。この記事が異様に気になり、私にとって本の中で一番輝いて見え、いすれば「行こう」と決めていた。

こんな熱い思いが通じたのか—昨年、県の地域づくり屋台の第3分科会に「四季の里、藤森文江さん」の字が目に飛び込んできた。もちろん、この分科会に出席。

藤森さんの穏やかな人柄から大胆な行動。それがとても不思議で、でも理解もし、感動もした。藤森さんたちは、目の前にある事を自然体で取り組んでいることが、まるでその場にいるように疑似体験することができた。このことが夢でないことを願い、「やっぱり現地を見てみたい」との思いが強くなつた。分科会の担当の濱さんが藤森さんを招待したと聞いたときは、「なかなかやるものじゃん」と私なりに評価した。そこで、すぐ濱さんに「四季の里に行こう」と誘惑した。

時間が少しかかつたが、これまた実現!! 大井川が昇高々で、茶畠の緑と大井川鉄道の煙がより一層「どんなもんだ」と言つているよう。

「四季の里」は、想像以上だった。そこには、世間で言う「活気がある」と一言で片付けたくはないものがあった。お客様もメンバーの人たちも淡々としていた。押し付けがましくなく自然なのである。この心地よさは何なのだろう。女性特有



のやる気を上手に引き出され、心の安心できる居場所になっているからであろうか。

男社会では、絶対にない空気、そして仲間だと感じた。ごまかさず、正面から取り組んで、次から次に来る問題を解決しているのであろう。それぞれの役割分担でフルに活躍できる場があるからだらうか。行政が絡んだ店だと気怠さがすぐに気になるが、この店には、いろいろな事から超越したものを感じる。「よむぎ饅頭」の哀愁を帯びた形が四季の里のすべてを語っていると思えた。

背中に羽根のある藤森さんには会えなかつたのだが、お尻からホンワカした光を出すメンバーの人たちとの取り合はせは、抜群であった。

中野文枝(じんのび悠人)



女性の地域づくり

「女性ががんばる地域づくり」ということで一路、静岡に向けて出発。「たかが、よもぎ饅頭くらいで村おこし?でも億単位の年商はすごいな」と期待感で胸を膨らませて出かけた。大井川沿いに、いくつも山を越えやつと現地へ。店の構えは思ったよりもすつきりとしたもので、中には女性の気を引くものばかり。昔を思い出すなつかしい品物が、所狭しと並んでいる。奥には、結構な年齢層の人たちがそば打ちをしているが、大変清潔で気持ちが良い。

あれもこれもいっぱい買いたい気持ちを抑えて研修室へ。あいにく藤森さんは、おられなかつたが、当初より苦労と共にした中村俊江さんの話を聞くことができた。農協婦人部の野菜販売で苦労し、どうすればお茶の農閑期に収入を得ることができるか、何も無かつたところから自分たちのヘソクリを出し合つて知恵を絞りあつたこと。有線放送を使って地元住民にヨモギ等の供出の協力を求めながら、これだけの事業に創り上げて来たことなど、苦労話をたくさん聞かせていただき、大変感動した。何か行動を起こすときは、並大抵のことではないなど、自分たちの甘さを反省させられた。

「四季の里」を訪ねて

見事に手入れされた茶畠と豊かな自然の中に中川根特産品販売所「四季の里」があった。自称「考える前に走り出す癖のある無鉄砲」な藤森さんは、遙か石川県から我々が来ることを忘れて(?)出張に出かけてしまっていた。

「あの人は鉄砲玉みたいな人やからね。すみませんね。」と我々に話してくれたのが中村俊江さんだった。頼り甲斐のある風貌と素朴な語り口。このどっしりとした存在感は只者ではない。事前に藤森さんたちのことを書いた本「農村女性起業が食を変える・社会を変える」を読んでいたが、まず行動を起こす藤森さんをしっかりと支え、時には苦言を呈した人に違いない。常設店「四季の里」を始める前、農協婦人部で朝市の活動を七年間続けていた時からのメンバーらしい。一九八六年、四季の里開店の際、一年中売れるメインの商品「よもぎ饅頭」を担当した人だ。当時、今を逃すと柔らかいヨモギが手に入らないと判断した藤森さんが虎の子の五十万円すべてを、はたいて買い込んだ山のようなヨモギをありつけの鍋で夜更けまで茹でながら、大変な作業を最後まで手伝つたそうだ。時には喧嘩をしたり泣いたりした、かけがえの無い仲間だ。

はじめ、各自の家で饅頭を作つて店で販売していたため保健所から食品衛生法違反で注意を受け、出資金を募つ

実際に「よもぎ饅頭」をいただいたみたが、餡も甘くなく大変おいしい。ヨモギという故郷の香りを味わいながら、これならまた食べてみたくなると感心した。故郷を思い出すような、なつかしい味の「よもぎ饅頭」や、母の手づくりの味のいなり寿司、そしておはぎ等、日本各地から注文や来店があるのは、当然という気持ちになった。

農村女性がゼロから始め、起業で地域社会を変えた中川根町の婦人パワーのすごさを感じ、これをヒントに少しでも自分たちの地域づくりに協力できればと、帰路につく車窓を眺めしみじみ感じていた。

井上順子(薬師の里・郷土食研究会)



て加工場を作ることになった。農協婦人部全員にメモ用紙を渡し、その場で自分の出資できる金額を書いてもらったそうだ。「出資してくれた人は、そこで働くことができるが、万一倒産したら一切お金は返さない。利益が上がつたら分配しよう。決心は今夜、ここでしてください。」との申し出を受けて即断即決で集まつたメンバーだ。当時「一村一品」とか「村おこし」のブームに乗つて順調で、やがて家族からも仕事として理解されるようになり、法人化することとなつた。最初十七人でスタートし、内三人が高齢などでやめたが、現在は販売専門の人も入れて総勢二十人が就労している。

客足を見ながら饅頭やソバを作つたり、お客様が無いときは三時くらいで帰宅したり、柔軟な勤務形態で無理がない。何つた日はイベント参加で二日続きで朝の四時起きで饅頭つくりだったそうだが、途切れる事の無いお客様で売り切れた饅頭やソバをまた作るといった按配だった。そこには、つくり手の顔と手が見え、なつかしい手作りの味があり、ふるさとに立ち寄つたような安心感があつた。

四季の里で働く人のほとんどが共同経営者で、それぞれ一所懸命生き生きとしている姿が印象的であった。走る人、支える人、作る人、売る人、それぞれの個性輝く見事なスクランブルだと思った。

林 弥子(まれびとピア懇話会)





第13回地域づくり団体 全国研修交流会[長崎大会]

会期／平成12年8月24日・25日
会場／長崎県大村市・小浜町



町づくりは後世へのおくりもの

【全体会】

大村会場の全体会での挨拶の中で、全国各地で地域づくり活動に尽力され、ふるさとを支えている登録団体の数が、この2000年8月で、なんと4031団体もあるということをお聞きして、びっくりいたしました。この数は、6年間でなんと6割増しになってきたということでした。

【事例発表】

大村会場での事例発表で、私自身いろいろなことを聞いかけられた気がいたしました。テーマは「地域づくりを結ぶもの」。

一人目の方は、「連携と交流のみち・長崎街道」と題し、長崎街道まちづくり推進協議会事務局長 古賀方子氏の発表で、長い歴史が今を生み出したんだなあと感じました。

長崎街道は、佐賀、福岡、長崎の三県と街道沿いの31の市町で、同じようなテーマで活動してきたが、効率的だったようです。ところが、平成3年に長崎JCが街道沿を歩いたのがきっかけで、平成6年通産局で興味を持たれ、連携活動が行われるようになり、だいに活動しやすくなつたとき、今度は郵政局が地域の郵便利用ということで、活動に大きく手を貸して下さったそうです。

この連携が、ようやく「長崎街道まちづくり推進協議会」の立ち上げに繋がつたようです。

二人目の方は、「ボランティアと災害地支援」と題し、特定非営利活動法人 島原ボランティア協議会 高木 浩徳氏の発表に、私は心打たれ、また災害地における管理体制というシステムに改めて意識を向かせていただいたような気がします。

【分科会】

分科会は、第7分科会「地域で育てる子供たち」というテーマで、三つの会の方々の事例発表でした。

とても感心したことは、有明童話の会「くすのき」永田

香代子さんの発表でした。平成元年、「子供たちにふるさとのお話を」「子供たちに、心の中にふるさとの良さを育てて巣立つてほしい」という願いのもとに、有明童話の会「くすのき」が立ち上がつたそうです。皆さんのその願いは、10数年経つ今も何一つ変わることなく、活動は有明町にステージがあるにもかかわらず、世界へと羽ばたいているのです。10数年前には、「くすのき」に毎日通つて育つた子供たちが、点字の出版をしたそうですし、また現在通つている子供たちの、自分たちが運営に参加したいという思いからは、子供お話を会の「きくの会」ができあがつたそうです。テーマ通り、「地域で育てる子供たち」に、活動を通して自然と発展していくつうです。

「くすのき」の永田 香代子さんの「たこ婆さん」の語りが始まり、有明の町を垣間見ることができます。(語るとは)単にお話の内容を伝えるのではなく、その主人公の生きざまや人柄が分かってくる。そして自分自身の人生観が見え始めてくる、と言つた話に、「なるほど」とうなずいていました。

分科会や全体会を通して、みな、ふるさとの良さを伝えていくことの大切さを心得ておられ、感心しました。

〈町づくりの基本は〉

自分たちの町を、次の世代に伝えたい
後世へのおくりもの

永田さんは、語りの最後に、決まって「お話は終わるけど、人生は続くよ」と締めくくるそうです。果たして、私の後世へのおくりものは?と考えさせされました。今一度、私の住んでいる小松の再発見を、これから的人生において続けたいものです。

【全体を通して】

地域づくりには、まず、再度地域を見直し、地域の良さを再確認した上で、そのことを後世の子供たちに、いかに生きた知恵として伝えていくか。また、後世へいかに地域をそのまま残して伝えられるか、といったことです。

これから、地域で一人ひとり、いかに気づき、自然と人材が育っていくかということを踏まえた活動を行っていきたいと思っております。

石田和美(西尾ふきのとう塾)

21世紀に伝えたい地域づくり

新世纪を迎える前にもう一度、地域づくり活動のあり方を皆で語り合い、交流を深める目的で、21世紀に伝えたい地域づくり「全国の地域づくりの花が咲きそろいます、八月長崎で」をテーマとして開催されました。

(1)全体会での事例発表

テーマ：地域づくりを結ぶもの

①長崎街道まちづくり協議会は、「連携と交流のみち・長崎街道」と題して、民間が主体となり長崎街道を参加と連携で結び、広域団体の役割や、ノウハウ・情報の交換を行つてゐることでした。連携はあくまでも手段であつて、各々の個性を磨きながら競争と協調によるまちづくり活動を発表してきました。

②島原ボランティア協議会は、「ボランティアと被災地支援」と題して、何時どこに起るか分からぬ災害に備えたボランティアネットワークの必要性を説いておりました。目的意識を明白にして、連携行動をとることが、私たちにも必要不可欠なものであると痛感しました。翌日は、その普賢岳の被災地を視察して、自然を恨まず、共に立ち直ろうとしている住民の姿勢に感銘を受けました。

(2)分科会での松坂 健さんの基調講演

①新世紀の観光(リゾート)は、FASTからSLOWへと、間を大切にする観光に移行しつつあり、お金をかけないで観光する人たちの対応が必要であることを説いておりました。時間を活性化させる方法は、ケアフリー、ガーデング、熱狂、仲間、経験の経済学であり、まちおこしは、力まないでセンスを売ることが大切であると教えられました。

②「雲仙旅館ホテルUNZEN21」の事例発表では、ある文化を生かし、観光客全員が参加できる長期滞在型の健康と癒しの場となるリゾート地を目指し、住民、行政が協働したまちづくりをおこなっていることを発表しておりました。雲仙は、この「UNZEN21」の活動が続く限り、これから一層栄えるだろうと思いました。

(3)まとめ

観光客のニーズが多様化したり変化している中で、個々ではなく地域全体で、地域の魅力と問題点について論議して、将来のビジョンをつくり、その地域にある自然環境と歴史・文化に力を加え、魅力あるものにつくり上げていきたい。自分たちが住んで誇れるまちでなければ、自信を持って他人にすすめられないのではないかと思います。今回の地域づくり団体全国研修交流会に参加できたことを機会に、研修会で学んだことを活かし、地域の価値観を見直しすることからはじめ、住民主体のまちづくりに参画していきたいと心に決めております。

小島恵子(七尾市総務部企画課)



元気な女性たちとの出会い

8月24日・25日、長崎県大村市の体育文化センター「シーハットおおむら」で「地域づくり団体全国研修交流会」が開催され、「家族とくらしの会」の一員として参加した。

わたしは、第2分科会「地域産品を生かした地域づくり」に参加した。事例発表は一瀬正治さんの「地域資源を活かす拠点づくり」、山口初枝さんの「シルバーパワーでいきいきと」、平田絹枝さんの「地域に根づいた加工活動のあゆみ」、日宇スギノさんの「都市との交流による地域づくり活動」の4つで、それぞれに地域性を生かしたユニークな活動の報告であった。

今年4月にオープンした一瀬さんの「おおむら夢ファーム「シュシュ」」は、資源活用型で地元農産物の生産加工、販売を通して、地域経済の活性化と消費者との交流を深める場を作った。アスパラガスやごまのアイスクリームの販売、収穫体験施設利用などによって満足を提供し、村が元気になる仕組みを作りました。

山口初枝さんの田平町農水産加工研究グループは、ふるさとふれあい活性化事業を利用して、「豆太郎君」に「キャロットちゃん」と名付けた「かりんとう家族」を生産販売している。田平町は平戸大橋完成によって、「すどおりの町」になったが、朝市「瀬戸のより道」を毎日曜日に開催して、にぎわいを取り戻した。

平田絹枝さんは、長与町生活改善グループ連絡協議会の会長として、加工所運営を通して男女共同参画社会実現に向け

て、学習活動を行つている。

日宇スギノさんは、都市や外国の人々とハーブによる交流活動を進めている。

分科会の後は、合同交流会。オカリナやケーナのアンデス音楽を聴きながら、長崎ちゃんぽんや、海の幸山の幸を堪能させてもらった。ここでは福島県のまちづくり会議の吉田真由実さん、芦屋で環境問題に取り組んでいる「草の風」の山田美智子さん、和歌山で薪能の公演を成功させようとしている総田さんたちとの出会いがあった。行政の人が多くたが、元気な女性の参加も思った以上にあり、実のある大会になったと思う。

二日目は現地視察。大村商店街の「まちかど研究所」は、空き店舗を利用した街づくりの拠点で、市民の情報発信、コミュニケーションの創造、交流の場として活用されていた。その後、「とりかぶと自然学校」「おおむら夢ファーム「シュシュ」」「ハウステンボス環境施設」を視察。

今回は会場が遠く、移動に時間がかかりすぎたかなと思う。ネットワークも広がり、意欲ももらえたので、点数なら8.5点といったところである。

廣岡立美(家族とくらしの会)





第14回自治体学会「新潟・長岡大会」

会期／平成12年8月24日・25日 会場／長岡リリックホール

議論を尽くして活性化を

去る8月24・25日、新潟県長岡市において、全国自治体政策研究交流会議と自治体学会が開催されました。その中で、25日の午後から行われた自治体学会の分科会について報告します。

11分科会が開かれ、私は第6分科会に参加しました。テーマは「都市から街が消えていく」でした。パネルディスカッション形式で、コーディネーター1人、パネリスト5人(行政3・民間2)の構成でスタートしました。現在、都市中心市街地の空洞化が大きな社会問題となっている中で、活性化・再生を図っていくために何が必要なのかを話し合いました。それぞれの立場でいろいろな仕掛けを発表された中で、私自身一つの疑問が頭の中に浮かんできました。

それは、「なぜ、中心地活性化が必要なのか」ということです。住民(利用者)が利用しやすく、また楽しめるかたちであれば、住宅地ができるまわりにコミュニティスペースや商店ができるのが、時代の流れではないでしょうか。土地の高騰や所得の不安定さによる住宅地の変化についてゆく街づくりを目指せばよいのでは?という考えです。

問題は、地域住民と行政・商店街のそれぞれの立場をできるだけ理解しようとするような議論が十分されないまま実行され、それぞれが不満を残すことが多いところにあるのではないかでしょうか。

今後、もっと時間をかけた上で、三者がそれぞれ、地域の良いところ・悪いところを見つけて話し合いを持ち、街づくりを進めていく必要があると感じました。

坂本 勝(松任まつり保存会)



新たな時代の創造 ~分権・自治、新潟からの新しい波~

第17回全国自治体政策研究交流会議・第14回自治体学会・新潟長岡大会



21世紀に向けた社会の仕組みづくり

第17回全国自治体政策研究交流会並びに第14回自治体学会が8月24日、25日に新潟県長岡市を会場に開催され、自治体職員及び学者、企業、NPO関係者など約700人が参加して論議を深めました。大会テーマは「新たな時代の創造」で、21世紀に向けた社会の仕組みづくりを多面的な角度からアプローチしたものです。

■まちづくりは豊かなコミュニケーション

記念対談で、平山征夫氏(新潟県知事)は、21世紀の行政のあり方として①県民サービスの改革②NPO等とのパートナーシップのあり方③事務事業の評価④財政の改革⑤組織・機構・人事制度の改革——に取り組む姿勢を明かにしました。また、大森彌氏(千葉大学法経学部教授)は、国でできない仕事を自治体が行うことが分権の中で必要なことである。そのことに気づいた自治体と、現状のままの自治体では大きな差が出る——と指摘しました。

基調講演では、豊口協氏(長岡造形大学学長)は、インターネット時代に重要視しなければならないのは、face-to-faceであり、コミュニケーションである。インターネットは単にツールである。インターネットで情報を集め、それを実際に自分の目で確認しなければならない。まちづくりとは「豊かなコミュニケーション」である——と、まちづくりの原点を強調されました。

■多様な活動が地域を面白くする

パネルディスカッションでは、栗原道平氏（信濃川ウォーターシャトル代表取締役社長）は、500人の市民が1人30万円を出資し、1億5,000万円で信濃川を活かした水上バスを走らせている。船上レストランや結婚披露宴の場として利用され、新潟の新しい顔になりつつある。——と発表。北川フラン氏（大地の芸術祭プロデューサー）は、1市4町1村が、屋外の自然、棚田、廃墟施設を活用した大地の芸術祭を展開している。世界から32カ国、34人のアーチストと地元の人々との協働作である。すでに20万人の人が訪れている。——と発表。浅野ゆうこ氏（にいがたNPOネットワークプロジェクト）は、各地で市民活動やNPO活動、ミッション活動など、多様な形態で活動が展開されている。これを一くくりにするのは危険なことであると思う。社会に起きている歪みについて大上段に構えず、自分のできることから始めることができると考える。——と、それぞれの活動体験を発表しました。



■行政の公開と説明責任

セミナーでは「時代を捉えて自治体はいかに変わるか」をテーマに論議が展開され、樋口恵子氏（東京家政大学教授）は、地方自治体は国によってバラバラにされている。中央集権には①バラバラ②縦割り③無駄使い④上向き⑤無責任⑥指示待ち⑦住民不在——の7つの大罪がある。これを変えなければ、国と市町村の関係は変わらない。官と民の対等、男と女の対等な社会をつくらなければならない。——と手厳しい批評をされました。また、池上岳彦氏（立教大学経済学部教授）は、課税自主権を使用するには理由を明確にしなければならない。住民との信頼関係が最も重要である。カナダでは、起債を受けるにも住民投票が行われている。住民の負担を事前に公開することが必要である。——と、行政の公開と説明責任を強調されました。大森彌氏（千葉大学法経学部教授）は、自治体を変えるには、地方公務員制度を改正すべきである。現在の制度では、特別に問題が生じなければ降任、降給ができない。自治体の人事管理は甘い。民間から自治体への登用はあっても、自治体から民間への引き抜きはない。特に管理職の弱点は自己形成のダウンである。人事は内部管理になっており、住民に伝わっていない。勤務評定と事務事業評価を連動して行わなければならぬ。一般事務職について10年を目途にした任期制を導入してはどうだろうか。行政に民意をどのように反映させるかは、首長の態度によって大きく異なる。時代を超えて自治体をどう変えるかについては、変化を義務としてやるべきではない。変化は権利として、悪戦苦闘を喜びとして取り組んでいただきたい。——と、具体的な提言を交えて方向付けを示されました。

第8分科会では、「NPO—自治体間の関係：支援と協働」をテーマに議論されました。事例報告では、熊澤隆士さん（鎌倉市職員）が、平成10年5月に公設民営で「鎌倉市市民活動センター」を立ち上げ、運営は特定非営利活動法人 鎌倉市市民活動センター運営会議に管理委託し、①会議室や作業室、機材の提供などによる場の提供 ②情報の収集や提供 ③ネットワークづくり ④学習・研修の場の提供 ⑤普及啓発——などを行っていることを発表。西川正さん（さいたまNPOセンター）は、昨年、センターを設立し、埼玉県から緊急雇用対策事業として、介護保険に関わる事業を11年度6,600万円、12年度9,900万円で受託。行政と初の協働であったが、行政の信用をバックにNPOのネットワークを最大限に活用したことで、行政や民間営利団体にできない内容の充実した事業が展開できた。——と発表し、会場からため息が漏れた。

コメントーターとして、阿部圭宏さん（淡海ネットワークセンター）は、行政が公設公営でNPOセンターを設置する場合、計画段階から市民を巻き込まなければならない。NPO支援センターは県を対象とするものと市町村を対象とするものと分けた方が良いのではないか。——と加えた。また、直田春夫さん（蓑面文化フォーラム）は、公設でNPOセンターをつくる場合、民営であっても市民が必要性を求めていなければ設置すべきではない。蓑面市では昨年、「蓑面市非営利公益市民活動促進条例」を制定し、NPOの支援を始めている。活動支援としては、公開コンペにより補助金を交付し、併せてマネジメント講座も実施している。——と苦言を交えた意見を出された。東一洋さん（日本総研）は、民営化によるNPOの市場創出規模は約1,100億円と推定している。行政とNPOを仲立ちするシンクタンクとして機能している。行政とNPOは「きちんと正しく」付き合うことが原則である。NPOに委託する基準や選定の仕方、発注の仕方などを理論化しなければならない。——と、今後の協働のあり方を提言しました。

第8分科会の内容は、協働の実践例を交えながら、今後の方向性を探ったものとして、かなり興味深いものでした。行政とNPOの関係は、これから築いて行かなければなりません。受委託や下請けの関係ではない、イギリスのグラウンドワーク・トラストのような対等な関係が望まれます。その理想に向かって着実に進めたいものです。

大湯章吉（能登乃國ゆするぎ塾）



Core Essay

[コーディネーター]

土屋 敦夫

滋賀県立大学 人間文化学部教授

金沢にはずっといるつもりだったんですが、2年前に離れてしまいました。金沢工大の講師、助教授、教授を経て25年いましたね。建築の歴史、古い民家やまちなみを調査したり図面におこしたりしながら、どういう風にまちなみを保存するかとか、まちづくりに活かしていくかをずっとやっていました。その間、金沢はもちろん、野々市、鶴来、川北とあちこちで。

山中町には、景観条例づくりの委員として関わりました。例えば道路を広げる時、どう山中らしい景観をつくり出すか、また山中らしさそのものが無くなりつつあることをどうするか。

最近、景観条例をつくるのが流行りですが、目的は土地によっていろいろです。広告物の排除だつたり古いまちなみの保存だつたりします。山中の場合は観光が頭打ちなので、誘因材を取り入れて風穴をあけたいという面もあった。同じ漆器のまちでも輪島は漆器のまちらしさがあるけど、山中の漆器屋さんは外へどんどん出て町に残っていないし、温泉も川沿いに行つちゃった。町の中心部は温泉情緒が失われてきているんです。

本当は、漆器と温泉というのは、イメージしたら最高のとりあわせ。「うちはこういうまちだ」と言いたい時に、非常に際立つ特徴になる。山中には、さらに自然が背景にあります。これを活かしたまちづくりをしない手はない。

富山の八尾は希有な例ですが、そこには「おわら」を中心とまとまりうる住民感覚があつて、「おわらの街流しができる町並みを作ろう」ということで充分に理解し合える。八尾ももとは古い町並みがあったのですが、実はあまり残っていません。柳も、道路を拡幅してバスを通すために昭和30年頃にちよん切つちゃった過去がある。道路を広げバスを通すことが街を活性化するという近代化の論理だつたけど、今はおわら風の盆に合わせて古い町並みに戻そうとしている。また、桂樹舎の吉田桂介

「まちなみの特徴が街の魅力を語る」

さんが民家などを移築した時に、彼に叩き込まれた大工がかなりいるんです。そんな建物が「これは良いね」と評判をよんで広まって、全国百選の道の諏訪町に多い昔風の住居なんかはそれで増えた。行政は道を舗装してきれいにしただけ、大工組合には、八尾らしいどっしりした家を作つていこうという共通認識ができている。これらはすごく良いことだと思う。家のデザインがパターン化しそうとか、現代モダンが加わつてもいいと言う人もあるみたいだけれど、僕は「八尾は八尾」だと思う。「おわらが似合う街でいっちゃんおう」という潔さが、魅力として人に伝わっているんじゃないかな。

今、彦根に関わっているなんだけれど、金沢よりはるかに古い建物が残ってる。これを活かしたいね。長浜の大通寺の表参道は、富山の城端を見てやつたもので、本家の城端には雁木のある通りがなくなつて、長浜の方がうまくやっている。全国各地がお互いにヒントになる時代かもしれない。

ただ、ハードが出来ても、店の商売の中味が変わつていなければ、商店街自体は何も変わらない。相変わらずリピーターが多い長浜も、なんとなくバタ臭くて非日常の雰囲気をうまくつくっているんだけど、それだけでなくやはり美味しいものを食べさせる店が増えている。特に、まず一つ名物を作る、といったやり方がいいんです。長浜は、地元の積極的な人と外部の人間がうまくかみ合つて良い結果になった例ですね。

彦根でも長浜でも、やっぱり地元に「核」になる人間がいて、がむしゃらに動いて周囲を元気づけて頑張っているから、面白くなつていくんだね。

山中には、八尾にはない「温泉と漆器」があり、「山中節」がある。いい歌だし、なんでやらんのか?と思いますよ。うまく使えばおわらを超えると思うよ。この3つがあつたらね。(談)



編集後記

由 布院で出会った学生たちは新しい世界を垣間見てくれた。地域に関わる学生たちの意欲の高さとネットワークの広がりに感心させられました。若い層との連携を模索してゆきたい。(高峰)

石川県地域づくり推進協議会 情報誌

My Page

Vol.7 2000年10月発行

発行

石川県地域づくり推進協議会

事務局/石川県総務部地方課振興係内
金沢市広坂2-1-1 〒920-8580
TEL076-223-9058 FAX076-223-9486
E-mail:chiiki1@pref.ishikawa.jp
URL http://www.pref.ishikawa.jp/tihou/